

別紙 1 - 1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	甲	第	号
------	---	---	---	---

氏 名 豊田 良鎬

論 文 題 目

Cholangiographic Tumor Classification for Simple Patient Selection

Prior to Hepatopancreatoduodenectomy for Cholangiocarcinoma

(肝膵同時切除を要する胆管癌患者における胆管像分類を用いた簡単な患者選択)

論文審査担当者

名古屋大学教授

主 査 委員

小寺 泰弘 

名古屋大学教授

委員

長 紀 恒 


名古屋大学教授

委員

碓氷 章孝 

名古屋大学教授

指導教授

柳野 止人 

論文審査の結果の要旨

別紙 1 - 2

今回、肝切除兼膵頭十二指腸切除を要する胆管癌患者において、術前胆管像とそれが予後に与える影響を評価することにより長期生存の特徴および本術式の至適な患者選択法を検討した。後方視的検討の結果として、主狭窄・腫瘤が上部胆管、中部胆管、下部胆管の2領域以内にとどまる限局型では、3領域に広がるびまん型に比して予後が良好であることがわかった。また、単変量解析では胆管像分類に加えて高齢（70歳以上）、経皮的胆道ドレナージ、門脈切除、中・低分化型腺癌、pT3/4、リンパ節転移、断端陽性が予後不良因子であり、多変量解析では高齢、経皮的胆道ドレナージ、びまん型、門脈切除が独立予後因子であった。これら4因子はいずれも術前評価が可能であり、その該当個数は予後と強く相関していた。この4因子を用いることで効果的な患者選択に寄与すると考えられた。

本研究に対し、以下の点を議論した。

1. MDCTによる術前画像診断で、門脈切除が必要である症例を94%の正確さで診断するという報告がある。そのため今回の検討においても門脈切除の必要性の有無が、術前に予想可能な因子であると考えられる。
2. 胆管癌においては表層拡大進展を来すことが特徴的であり、肝外胆管癌では6-15%の症例において主腫瘍から2cm以上にわたり上皮内癌が認められるとの報告がある。胆管像単独ではこれらの術前診断は困難であり、術前マッピング生検が有用であると報告されている。
3. 胆管癌術後患者に対する補助化学療法に関しては治療成績向上に関するエビデンスに乏しく、現時点では術後補助療法は推奨されてはいない。

本研究は、肝切除兼膵頭十二指腸切除を要する胆管癌患者をより効果的に選択する上で、重要な知見を提供した。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号	氏 名	豊田 良鎬
試験担当者	主査	小寺 泰弘	副査 ₁	長 紀 悦
	副査 ₂	碓氷 章彦	指導教授	柳田 正人
(試験の結果の要旨)				
<p>主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none">1. 術前に門脈切除術の必要性を診断可能かどうかについて2. 胆管癌の腫瘍進展様式について3. 補助療法による治療成績向上の可能性について <p>以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、腫瘍外科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。</p>				